

蕭繹の「玄覽賦」について

福井佳夫

目次

- 一 野心勃勃たる巨篇
- 二 十の章段
- 三 紀行賦のながれ
- 四 自信満々
- 五 国家的規模の自慢
- 六 漢賦ふう雄大さ
- 七 ごった煮
- 八 紀行から言志へ
- 九 あざとい印象

一 野心勃勃たる巨篇

蕭繹（五〇八―五五四）は元帝とも称され、南朝梁の天子にもなった人物である。皇帝菩薩と称された仁君、梁武帝の第七子にあたる。ただ、彼が帝位にたっていたのは、晩年の三年ほどの期間（五五二―五五四）にすぎず、生涯のおおくは梁の諸侯王、つまり地方官としてすごした。本稿でとりあげようとする「玄覽賦」も、彼が諸侯王、具体的には江州刺史だったときの作である。それゆえ本稿では、帝号の元帝でなく、本名の蕭繹と称することにしよう。

この蕭繹を政治家としてでなく、ひとりの文人として見たとき、どうした位置にあるのだろうか。

文学史上では、なんとといっても大規模な焚書によって、悪名がなりひびいている。すなわち蕭繹は、その最期、都の江陵が西魏軍によって陥落させられたとき、「文武の道、今夜尽きたり」と嘆じて、十四万巻にのぼる書物に、火をはなつたのである。この蕭繹による焚書は、書物の五厄のひとつとされるなど、文学史、いや文化史上にのこる蛮行として名だかい。蕭繹は史上、かかる蛮行を演じた暗主として、弾劾されてきたのだった。

そうした蕭繹であるが、けっして詩文や書物がきらいだったわけではない。むしろ、読書や著述することができたまらぬ、文人肌の人物であった。じっさい彼は、六百七十七巻にのぼる著述を完成させている（『金楼子』著書篇による）。この膨大な巻数は、編纂ものや側近の協力によったものもすくなくはないといえ、個人の著述量としては突出しておおいものだ。

こうした彼の著述のうち、經史子の方面のものはさておき、集つまり詩文関連の諸作は、いかに評されるべきか。従前の見かたでは、彼の詩文は、「兄蕭綱（梁簡文帝）とならんで」艶詩を鼓吹したものと評されることも

あれば、エッセイ集『金楼子』（不完全だが、現存する）中のユニークな文学論が注目されることもあった。

そうした各様の見かたがある彼の詩文だが、私は、蕭繹の個性がよく刻印された力作として、「玄覽賦」といふ篇をとりあげたいとおもつ。この「玄覽賦」、他の作を圧する巨篇であること、彼自身も自信をもっていたらしいこと、そしてなによりも「艶詩のごとき遊戯的なものでなく」、半生を回顧した真摯な内容を有すること——などからみて、蕭繹もそうとう力をいれてつづつたものとおもわれる。

この賦は当時、そうとうよまれていたようだ。つぎのような話がある。隋の庾質（？～六一四）は、江陵にいた八歳のころ、蕭繹の「玄覽賦」「言志賦」など十賦を誦することできた。おかげで彼は童子郎を拜することできた、というものである（『隋志』巻七八）。庾質は、江陵陥落時に北周へ拉致された庾季才（五一五～六〇三）の息子である。するとこの話柄は、庾父子がまだ江陵で、元帝につかえていたころのことにちがいない（吳光興『蕭綱蕭繹年譜』三七一頁は、これを承聖三年（五五四）、江陵陥落直前のこととする）。おそらく、父の季才が主君（元帝）の賦を、息子によませたのだろう。主君の代表作であり、また「艶麗でなく」真摯な内容だったので、わが子に誦読させたのだとおもわれる（「採蓮賦」「蕩婦秋思賦」などの艶麗な賦は、よませなかつただろう）。「玄覽賦」は、そうした作だったのである。

では、そうした「玄覽賦」は、いかなる内容をもち、いかに評されるべきだろうか。本稿では、この「玄覽賦」をとりあげて検討し、文学としての位置づけや評価についてかんがえてみたいとおもつ。

はじめに、「玄覽賦」執筆前後の状況を概観しておこう（「玄覽賦」のテキストは、陳志平・熊清元『蕭繹集校注』上海古籍出版社 二〇一八 によった。同書は、賦の読解にあたって、おおいに参照させていただいた）。

この賦は大同十一年（五四五）、蕭繹三十八歳のときにかかれた。この年は、蕭繹が江州に刺史として赴任し

てから五年目である。これより三年まえの三十五歳のとき、蕭繹は劉敬躬の乱を鎮圧して、それまで苦手であった軍事方面にも、ようやく手ごたえを感じはじめていた。

そしてその翌年（五四三）には、母の阮修容が長逝したのである。蕭繹はマザコン気味で、成人後においても、母をつよく敬愛し、その教導にしがたがっていた。その母が死んだのだ。ふかく哀悼したには相違ないが、客観的にみると、蕭繹にとっては、一種の解放でもあったようだ。これで、彼を束縛するものは、身近にいなくなった。母うえ、みていてください。これからは自分の力で、なんでもやってみせます。蕭繹は亡き母に、心中でこうかたりかけたことだろう。

そうした事情があつたためだろう、この時期から蕭繹は、よくいえば自由奔放、わるくいえば野放図のほうずな言動がめだつようになった。そしてそうした言動が、周囲の人びとに傲慢とつり、警戒されるようになっていったのだ。たとえば、『隋書』五行志上には、つぎのような記事がのっている。

「大同」十年十二月、大雪、平地三尺。是時邵陵王綸、湘東王繹、武陵王紀並權倖人主、頗為驕恣。皇太子甚惡之、帝不能抑損。上天見變、帝又不悟。

大同十年（五四四）十二月、大雪がふって、平地でも三尺（八、九十センチ）ほどつもった。

この時期、邵陵王の蕭綸（六兄）、湘東王の蕭繹、武陵王の蕭紀（弟）の三皇子は、勢威が天子にならぶほどであり、たいへん驕慢であった。皇太子の蕭綱はこれをひどくにくんだが、武帝はこの三皇子の驕慢さを制御できなかった。上天が「大雪によって」変異をしめして警告したのに、武帝はそれをさとることもできなかったのである。

ここでいう「大同十年」とは、蕭繹が「玄覽賦」をつくる前年である。そのころすでに蕭繹は、「勢威が天子

にならぶほどであり、たいへん驕慢」だとみなされ、「皇太子の蕭綱はこれをひどくにくんだ」という状況になっていた。そうした時期に、この「玄覽賦」はつくられたのだ。つまり、精神的に解放され、周辺から驕慢だとみなされるほど自信をもち、「さあ、これからすきなようにやってやるぞ」という時期に、この賦はつくられたのである（以上、蕭繹の生涯については、拙稿「梁元帝評伝」中京大学文学部紀要第54 2、第55 1 を参照）。つづいて、「玄覽賦」の外貌をみわたしておこう。

第一に、標題が、なにか意味ありげだ。「玄覽」とは、もとは『老子』第十章にもとづくことばで、「玄妙なところから万物の真相を洞察する」（河上公注）ぐらいの意である。ものしりな蕭繹のことだから、さらに張衡「東京賦」の「睿哲にも玄覽し、茲の洛宮に都せり」や、陸機「文賦」の「中区に佇みて以て玄覽す」の用例も、意識していたのかもしれない。いずれにせよ、過去の用例からすれば、「玄覽」は、「じっくり観察する」「洞察する」などの意となる。すると標題の「玄覽賦」も、「じっくり観察した賦」や「洞察した賦」となり、深遠そうな意図がありそうだ。

だが実態としては、この作は、深遠な玄理を論じた思想的な賦ではなく、いろんな土地を巡遊した見聞や、途上での思いを叙したものにすぎない。つまり「梁内の地を、巡遊して」じっくり観察した賦」ということだ。すると標題としては、巡観賦や歴覽賦などとしたほうがふさわしかったろう。ところが蕭繹は、うまれつき体面をかざりたがるタイプであり、また玄学（『老子』『莊子』『易』の三書に依拠した学問）がだいすきだった。そのため、巡観や歴覽の語の陳腐さをきらって、深遠そうな「玄覽賦」という標題をつけたのだとおもわれる。

第二に、規模がきわめておおきい。句数でいえば六百五十一句、総字数だと約三千六百四十余字にのぼる。老子五千言といわれるように、あの『老子』一書がほぼ五千字だったことを想起しよう。賦ジャンルのなかから、

大作のものをさがしてみれば、司馬相如「子虚上林賦」三千五百七十字、陸機「文賦」千六百五十字、沈約「郊居賦」二千六百字などがあげられる。この「玄覽賦」をうまわるものとしては、左思「三都賦」一万二百字、謝靈運「撰征賦」四千六十字があるくらいだろうか。これらとの比較によっても、「玄覽賦」の規模がいかに雄大であるかがわかるだろう。

第三に、標題にこり、規模も雄大なだけに、彼の自信作だったようだ。こんな話がある。

蕭繹が「玄覽賦」をつくってから三年後の太清二年（五四八）の冬、とつぜん侯景が乱をおこし、建康を包圍した。この報をきくや、当地の使持節都督諸軍事だった蕭繹は、すぐ配下のものに命じ、軍をひきいて建康（父の武帝蕭衍と兄の皇太子蕭綱とが籠城している）に救援にゆかせた。そして、甥の湘州刺史・蕭譽と雍州刺史・蕭簪（ふたりとも、亡き長兄昭明太子の息子である）にも、建康に救援にむかうよう指示したのである。

しかし蕭譽と蕭簪は、自分が軍をひきいて建康にゆくことをこぼんだ。甥の二人はともに叔父（蕭繹）と仲がわるく、いざというとき（叔父との戦いの勃発）のことをかんがえて、根拠地をはなれなくなかったのだ。そして、自分たちに「救援にいけ」というくせに、みずからは建康に立出しようとするせめ蕭繹の動向を、つよく警戒していた。そして、それは蕭繹のほうもおなじだった。かくして、叔父（蕭繹）と二甥（蕭譽・蕭簪）とのあいだで、いつきに緊張がたかまったのである。

この叔甥の対立は、すぐに火がついた。それほど、たがいの嫌忌の情がつよかったのだらう。まず、蕭繹と蕭譽のあいだで、戦端がひらいたのである。二人のあいだでは、侯景を征討するにさいし、「蕭譽の」兵糧と軍隊をよこせよこさぬの交渉がつづいていた。使者が三度も往復したが、蕭譽はがんとして叔父の命にしたがわない。ついに蕭繹は、いうことをきかぬ蕭譽を討伐する決心をした。その結果、翌太清三年六月、建康の救援をほった

らかにして、蕭繹と蕭譽のあいだで戦いがはじまったのである。

そうした戦いのさなか、もうひとりの甥の蕭譽は、叔父蕭繹の意向をさぐるうとして、自分の知恵袋だった大宝を、蕭繹の根拠地・江陵に派遣した。これが同年の七月のことだ。蕭繹は、この大宝と以前から顔なじみだったので、大宝の訪問をたいへんよろこんだ。そして、自作の「玄覽賦」をとりだして、これに注解をほどこすよう命じたのである。大宝はわずか三日で、それをやりおえた。すると蕭繹は感心し、大宝に手あつい贈り物をしたのだった。

ところが、蔡大宝は、江陵訪問をおえて蕭譽のもとにかえるや、彼に報告したのである。「湘東（蕭繹のこと）は必ず異図有り。禍乱將に作らんとす。援を台城に下すべからず」。蕭繹はきつと心中に、野心を感じております。まもなく禍乱をおこすことでしょう。ですから刺史さま（蕭譽）は、建康に救援軍を派遣などして「兵力を消耗して」はなりませぬ——と。蕭譽はこの報告をきいて、やはりそうかと納得したのだった（以上は、『周書』卷四十八蔡大宝伝による）。

この話柄は、蕭繹が「玄覽賦」に自信があったことをしめしている。大宝にわざわざこの賦をみせたこと、そして注解をつくらせたこと、これらの行為は、「玄覽賦」のできに自信があったことを示唆するものだ。蕭繹としては、「こんなすごい賦をかいたぞ。どつた」という気分だ。大宝にみせたのだろう。

だがその賦は、危険な香りをただよわせていた。注解を命じられた大宝は、賦をよみすすむうちに、その危険な香りに気づいた。つまり「玄覽賦」は、蕭繹には自信作だったのだが、他人の目には危険な香り、つまり野心を秘めた作だとうつつたのだ。大宝から見ると、「玄覽賦」には「必ず異図有り」と断ぜられるほど、くろくろとした野心が刻印されていたのである。

この蔡大宝は、けっして節穴の持ちぬしではない。彼は、「性は厳整にして、智謀有り」という人物で、蕭簪の信任あつき知謀の士だった。文辞の才もすぐれ、当時の人びとは、蕭簪に大宝がいるのは、劉備のもとに孔明がいるようなものだ、おもっていたといふ。それほどの人物が、蕭繹の賦に「異図有り」と断じたのだ。すると現代の我われも、そうそう無視するわけにはゆかない。

大宝は、この「玄覽賦」のどうしたところに、「異図有り」と感じたのだろうか。そしてそうした見かたは、肯綮にあたっていろいろだろうか。

一一 十の章段

では、その蕭繹「玄覽賦」はどんな内容なのか。なにしろ約三千六百四十余字の巨篇なので、詳細まで紹介するのはむづかしい。ここでは、枝葉はさておき、賦の骨子だけ説明しておこう。

この賦は、標題が「梁内の地を、巡遊して」じつくり観察する（玄覽）なので、ひとまずは、紀行の賦に属するとみなしてよかつ。『紀行』とは『文選』の賦分類のひとつで、旅の途上での見聞や思いを叙したものである。じつさい、この時期までの蕭繹は、梁内の各地に赴任を命じられ、諸侯王として何年かずつ鎮してきた。そうした地方遍歴を広義の旅とみなし、赴任途上の見聞や任地での日々を回想してつづったのが、この「玄覽賦」なのである。

ただ、通常の紀行の賦とちがうのは、この賦における旅は、一行程だけではないということだ。通常の場合では、「甲地 乙地」の一行程が叙されるだけだが、この「玄覽賦」では、複数の行程が歴任してきた官位（また

赴任地)の順にならんでいる。

このときまで、彼はわかい順に、湘東王、琅邪・彭城太守、会稽太守、丹陽尹、荊州刺史、護軍將軍・石頭戍軍事、そして江州刺史(執筆当時)の官をへてきている。この「玄覽賦」でもその順に、任地への旅途やそこで日々が叙されているのである。つまり、「私は　の官となって任地へ赴任した。その旅途、あるいは該地でこんな見聞をし、こんな思いをもった」という記述が、何度かくりかえされるのだ。したがってこの賦をよむ者は、複数の紀行の賦をよみながら、あわせて蕭繹の人生行路をもたどってゆくことになる。つまり紀行と自伝とが、一体化したような構成になっているのである。

そうした実例をしめそう。まず、蕭繹は天監十三年(五一四)年、七歳のとき湘東王に封ぜられた。はじめての叙任である。そのときのことを、つぎのようにつづっている(第三段)。

伊俯己之顛愚、謬聯尊於天衢。

筮東門而画野、

創南国而分墟。

詔宗伯以為儻、用分茲於茅社、從侯服而俾予。

類金虎以封建、

誥内史而策書。

非桐珪以錫虜。

爾其湘水之東、即我龜蒙。

魏甘露而分邑、

鎮麟山之崔嵬、

金城高而相屬、

豈連鑣於分陝、

吳太平而定中。

傍龍跡其穹窿。

石燕起而依風。

羨追蹤於二公。

私は愚鈍の性を自覚しているが、あやまって皇室に生まれついた。そのため、東門で占卜して土地をわけてもらい、南方の湘東に国をたててわが所領とさせていただいた。

そのさい、わが父帝さまは、伯宗に詔して前導させたまひ、内史に命じて策書をくださった。そして

「封建のしるしの」土を茅社ほしやに分置し、侯服として所領を私にお与えなされた。それは、「古代に」金虎符をあたえて封建するのと似ており、「あそびで」桐珪とうけいをあたえて叔虞を封じたのとは、ちがうやりかただったよ。

こうして湘水の東方の地が、私の所領となった。かつて魏の甘露中に邑となり、呉の太平中に都邑をさだめた。この地はたかくそびえる麟山のもとに鎮座し、おおきな龍跡のそばによりそっている。堅固な城郭がたかだかとつらなり、石燕山はたちあがって故郷をしたうかのよう。ただ「幼少の」私など、どうしてこの所領に「他の地方王たちと」ならびたって、二公（周公と召公）を模したりできようか。

前半では、愚鈍な自分が、湘東王に封ぜられたことを、仰々しく叙している。「伯宗」「茅社」「金虎」「桐珪」「虞ぐに錫たつ」など、経書に由来する重厚な語句を多用するのに注意しよう。これは、父帝（蕭衍こと梁武帝）がおさめる梁廷では、官位の任命においても、由緒ある封建システムが正常に機能していることを、暗示しようとしたのだろう。

後半の「こうして湘水の東方の地が、私の所領となった」以下が、湘東の地を叙した部分であり（旅途の記述はなし）、いかにも紀行の賦らしい内容となる。まず「かつて魏の甘露中に邑となり、呉の太平中に都邑をさだめた」は、封じられた湘東の地の解説。当地は、魏の甘露二年（二五七。また呉の太平二年でもある）に、郡として独立したということのをのべたものだ。紀行の賦では、こうした土地案内ふう字句が、ときどき叙されている。つぎの「この地はたかくそびえる麟山のもとに鎮座し」云々は、当地（湘東郡）のようすをのべた、叙景ふうの記述である。湘東の旧跡や景物が、あたかも実見したかのごとく叙せられている。

もっとも、湘東王に封じられたとき、蕭繹はわずか七歳にすぎない。じっさいは親のそば、つまり建康にいた

はずだ。湘東の地をおさめることはもちろん、当地に住したこともなかったにちがいない。したがって、ここの叙景はおそらく、成人後の知見に依拠してつづったものだろう。

さらに、末尾の「幼少の」私など、どうしてこの所領に「云々は、当地でわきおこった自身の思いを、叙したものである。ただ、すぐ下の「二公（周公と召公）を模したりできようか」もふくめ、真に蕭繹七歳時の述懐だとはかんがえにくい。こうした記述も、この「玄覽賦」執筆時（三十八歳）において、「あのころは幼少だったから、たぶんこうだったろうな」と回想したものとかんがえるべきだろう」。

以上、湘東王のときの記述をみてきた。蕭繹はこの湘東王を皮切りに、何年かごとに、あたらしい官（地方官がおおい）に任ぜられている。官が変わるたびに、任地が変わるわけだから、旧任地から新任地まで移動し、旅行することになる。蕭繹は、そうした新任地への移動や、任地での「職掌にともなう」巡遊の体験、そしてそれらの旅途でわきでできた思いなどを、この賦のなかにかきこんでいるのである。

つづいて天監十六年（五一七）、蕭繹十歳のとき、こんどは琅邪・彭城太守に任じられた。これによって、蕭繹は「湘東には赴任していないので」はじめて建康をはなれ、琅邪の地に赴任することになった。その任地変更をつけ、人生の次ステップへの変移をかたつたのが、

彼琅台之作守、有彭泗之嘉名。

彼の琅台こに之れ守しよと作るなや、彭泗の嘉名有り。

の二句である。この二句は、あたらしい官位（琅邪・彭城太守）と任地を示唆している。そしてそれは同時に、この「玄覽賦」があたらしい章段（第四段）へすすんだことへの、シグナルにもなっているのだ。

こうしたシグナルふう字句は、この「玄覽賦」のあちこちに散在している。それゆえ、その字句をみつけさえ

すれば、我われは、蕭繹の任地変更をしようととも、「玄覽賦」の章段をわけることもできるのである。その意味で、このシグナルをさがしてゆけば、この巨篇を読解するのに、おおきな便宜があたえられることだろつ。

そこで、「玄覽賦」中のシグナルふう語句をさがし、それにしたがって章段をわけてみよう。さらに冒頭の導入ふう部分と、末尾のまとめふう部分もくわえると、つぎのように分段できそうだ。

第一段 歳次旃蒙、月建司空。ノ乃肝衡而言曰。

導入ふう部分。江州刺史の自分が「玄覽賦」をつくった。七句、三十四字

第二段 惟天惟大、惟堯則之。ノ声高洙泗之右。

梁朝の天子（父の蕭衍）と皇太子（兄の蕭綱）を賛美する。二十八句、百五十六字

第三段 伊俯己之顛愚、謬聯萼於天衢。ノ羨追蹤於二公。

七歳のとき（五一四）、湘東王に封ぜられる。二十句、百十八字

第四段 彼琅台之作守、有彭泗之嘉名。ノ景樹徳之風声。

十歳のとき（五一七）、琅邪・彭城太守となる。二十二句、百三十二字

第五段 従王役於鏡中、浮文鷁而載鴻。ノ愧人瘼之何求。

十二歳のとき（五一九）、会稽太守となる。七十句、四百十六字

第六段 皇覽揆余之忠誠、詔入謁於承明。ノ乍響玄山之玉。

十五歳のとき（五二二）、侍中・丹陽尹となる。六十六句、三百三十七字

第七段 爰八命而建旗、誠非親而勿屈。ノ攀余轅兮不忍別。

十九歳のとき（五二六）、荊州刺史となる。二百六十三句、千四百九十字

第八段 奉信珪而入朝、驅駟馬而乘輅。↳ 鄙將饗之牛羊。

三十二歳のとき（五三九）、護軍將軍・領石頭戍軍事となる。七十六句、四百十八字

第九段 藉鴻私而置伝、復惟轂而懷方。↳ 嗟吾人之施薄。

三十三歳のとき（五四〇）、江州刺史となる。六十一句、三百十八字

第十段 親進退於我生、每篤靖而居貞。↳ 方絶筆於獲麟。

三十八歳のとき（五四五）、これまでの半生をふりかえる。三十八句、二百二十八字

以上、おもにシグナルふう字句によって、全体を十の章段にわけてみた（合計すると、六百五十一句、三千六百四十七字）。これは、文脈や押韻の相関を無視し、シグナル字句だけを目じるしにして、分段したものだ。そのため、すこし不都合な場合もないではないが、それでもこの段分けによって、当該の語句の「一篇中での」位置がわかるので、読解をすすめてゆくうえで、便宜があたえられるだろう。本稿のなかで、第五段とか第六段とかいった場合は、このシグナル字句によつた章段をさすので、ご注意ください。

そうした十の章段のなかから、いかにも紀行の賦らしい一節、すなわち、旅途のできごとや、そこから想起された故事を叙した部分を紹介しておこう。それは第七段、荊州刺史だった時期の、つぎのような文章である。

爰八命而建旗、誠非親而勿居。

心鳴鞞於龍角、
覆緹幕於熊車。

開轅門於淮渚、泛餘皇之容与。

吟紫駟之長歌、
奏玄雲之置鼓。

開右座而納文、
設左広而投武。

既風起而雲飛、復摧班而拉虎。泛樓船而鬱紆、憶霸楚之雄圖。

「悲驢馬之不逝、
忘鹿逐之長驅。」

豈烏江之天險、資赤帝之神符。

さて、私は地方官を命じられ、刺史の旗をおしたてて「荊州の地へ」旅することになった。枢要の地は、皇族でなければつけぬからな。旅途では鼓の音に龍角の笛声をまじえ、朱幕で熊型の手すりをもった馬車をおおった。そして淮渚わいしよで外門をあげ、ゆったりと大舟で淮水にうかんだ。ゆくゆく紫駟しじゆの曲を吟じ、また玄雲の鼓音を奏したよ。そして右座をあげておいて文士をまねき、左屋をつくって武人にはいつてもらったなあ。

かつて漢の劉邦は、大風がふき雲のとびかうなか、虎をひしぎその毛皮もやぶる勢이었다という。私は、楼船のうえで憂いを感じつつ、楚の項羽の雄図ゆうとを想起した。彼は名馬の驢すいがすすまぬのをかなしみ、天下をとらんとする意欲をうしなつたのだ。されば烏江の天険があつたとて、赤帝たる劉邦の符命を阻止できようか。

この部分では、「私は地方官を命じられ、刺史の旗をおしたてて「荊州の地へ」旅することになった」が荊州刺史への転任を示唆し、つづく「旅途では鼓の音に龍角の笛声をまじえ、朱幕で熊型の手すりをもった馬車をおおった」は、蕭繹一行が鼓笛もにぎやかに旅しているようすを叙している。さらに「淮渚で外門をあげ、ゆったりと大舟で淮水にうかんだ」によって、蕭繹らが舟航していることがわかる。

その舟航の途次、垓下のあたりだろうか、そこで蕭繹は、ふと漢楚の興亡を想起したのだった。かく旅行の途次、さまざまな故事を想起して感慨にふけること、これが「玄覽賦」、さらには紀行の賦のおおきな特徴でもあ

る。「漢の劉邦は、大風がふき雲のとびかうなか」は、劉邦がうたったという「大風歌」を引用したものであり、また「名馬の騅がすすまぬのをかなしみ」云々は、項羽が「垓下歌」をつくった故事をふまえつつ、彼の悲運に感慨をもよつしているのである。

ちなみに、この「玄覽賦」で想起される故事は、旅途の地域や特定の王朝に限定されることなく、多種多様な地域や時代におよんでいるのに注意しよう。たとえば、右引用の末尾「資赤帝之神符」句は、漢の劉邦に関する故事だが、これにつづく「於是途終灌壘」以下の句（引用は略）では、想起される故事は時代をかるくとびこえ、「楚漢の戦争から」三国の魏呉関連の話題にうつっている。そして、孫權、曹丕、張儼、辛毗、諸葛亮らに関する故事が、つぎつぎと連想されてゆく。ところが、その後でまた前漢にかえり、終軍や呉楚七国の乱、さらに劉安淮南の乱関連の故事が、つづいているのである。

こうした融通無礙な連想ぶりをみると、どうやら、旅行の行程と故事の内容とのあいだには、これといった配慮やルールはなかったようだ。つまり、蕭繹の脳裏に想起された故事が、想起されたままの順序で（つまりアトランダムに）、そのまま記述され、列挙されているのだらう。

三 紀行賦のながれ

蕭繹がこの「玄覽賦」をつくろうとしたとき、どんな作をモデルにしていたのか。それは、西晋の紀行の賦の名篇、潘岳「西征賦」（『文選』巻十に採録）だったらうとおもわれる。というのは、「玄覽賦」の冒頭は、

歳次旃蒙、月建司空。 変凌陰之呂、蕭子褰帷九水、作牧三宮。 乃盱衡而言曰、

扇広莫之風。

年のめぐりは旃蒙（大同十一年、五四五）にあたり、月は司空こと冬をさしている。氷室のごとき大呂十二月となつて、冬の寒風がふきつのでくる時節だ。

わたくし蕭繹は、九水こと江州の地で政務にはげみ、廬山周辺の刺史となつている。そこで私は周囲をみわたし、つぎのような賦をつくつたのである。

というものだが、これは「西征賦」冒頭の、つぎのような字句を模したものであるからだ。

歳次玄枵、月旅蕤賓。

丙丁統日、潘子憑軾西征、自京徂秦。 迺喟然歎曰

乙未御辰。

年のめぐりは玄枵（元康二年、二九二）にあたり、月は蕤賓こと五月をさしている。そして夏の十八日目にあたっている。

わたくし潘岳は、馬車の横木にもたれながら西方へ出立し、洛陽から秦地の長安へゆくことになった。そこで私はため息をつき、つぎのように歎じたのである。

歳星や十二次にもとづく「旃蒙」や「玄枵」の語によって年をしめすこと、自身のことを「子」と称すること、そして序文ふうの字句でありながら、韻をふんでいること——などの叙しかたは、蕭繹が潘岳の賦を模したことをしめしている。こうした継承関係からも、「玄覽賦」は紀行の賦の一篇だとかがえてよかる。

では、この「西征賦」や「玄覽賦」をふくむ紀行の賦とは、どのような賦であり、どのような歴史をけみしてきたのか。そのあたりのことを、ざっとふりかえっておこう。

紀行、すなわち旅を叙した賦といえ、文学史上では、楚辞の「離騷」「遠遊」などの天界遊行が、想起されてくる。だが、『楚辞』は特別なものだし、嚴密に賦ジャンルに限定したならば、後漢の班彪「北征賦」あたりから、名だかい秀作がうまれている。じつさい『文選』では、紀行の賦としてこの班彪「北征賦」を最初にあげ（巻九）、つづいて曹昭「東征賦」（曹昭は班彪の娘。曹大家ともいう。巻九）と、潘岳「西征賦」（巻十）の計三篇を採録している。

ただ『文選』は、やはり名篇限定の選集である。もうすこし視野をひろげて、『芸文類聚』をみてみよう。すると巻二十七「行旅」（「紀行」とおなじ意）に、この三篇もふくめ、つぎのような賦がならんでいる。

劉歆「遂初賦」、班彪「北征賦」、曹昭「東征賦」、蔡邕「述行賦」、崔琰「述初賦」、陸機「行思賦」、「思歸賦」、潘岳「西征賦」、郭璞「流寓賦」、張載「叙行賦」、袁宏「東征賦」、謝靈運「歸塗賦」、鮑照「遊思賦」、謝朓「思歸賦」、蕭綱「述羈賦」、蕭綱「阻歸賦」、江淹「待罪江南思北歸賦」、丘遲「還林賦」、沈約「愍塗賦」、張纘「南征賦」、沈炯「魂歸賦」。

合計二十一篇、すくなくない作例だ（「玄覽賦」は採録されていない。後述）。かくおおくの作例があるとすれば、⁴「玄覽賦」の特徴をあきらかにするために、潘岳「西征賦」と比較するだけでなく、これらの作にも目をくばっておく必要がある。

そこで、歴代の紀行の賦のなかで、『芸文類聚』が源流的位置におく劉歆^{（りゅうきん）}「遂初賦」をとりあげ、その大体を考察してみたい。この前漢の劉歆「遂初賦」では、序文がとくに注目される。

遂初賦者、劉歆所作也。歆少通詩書、能屬文。成帝召為黃門侍郎、中壘校尉、侍中奉車都尉、光祿大夫。歆好左氏春秋、欲立於學官。時諸儒不聽。歆乃移書太常博士、責讓深切。為朝廷大臣非疾。求出補吏、為河内

太守。又以宗室不宜典三河、徙五原太守。是時朝政已多失矣。歆以論議見排擯、志意不得。之官經歷故晉之域、感今思古、遂作斯賦。以歎征事、而寄己意。

「遂初賦」は劉歆の作である。歆はわかいころから詩書に通じ、文章をよくつづつた。成帝は歆をまねき、彼は黃門侍郎、中壘校尉、侍中奉車都尉、光祿大夫などを歴任した。

この劉歆、『左氏春秋』をこのんで、これを朝廷の学官にたてようとした。だが、学者たちは賛成しない。そこで歆は移書を太常博士におくつて、つよく非難したのである。そのため朝廷の大臣から、にくまれてしまった。やむなく彼は、地方の下役になることをねがいでて、河内太守となった。さらに、「宗室の者は三河地方につかえるべきではない」ということで、五原太守にうつることにした。

この時期、朝政には失態がおおかつた。この歆も、評議のうえで排斥されてしまい、志をえなかつた。そこで五原太守にうつるべく旅だったのだが、途中で以前の晋の地を通過した。そのとき、彼は現今に感じて往古に想いをいたし、この「遂初賦」をつづつたのである。そして賦中で地方への旅をなげき、おのが思いをのべたのだった。

この序文は、どうも劉歆自身がかいたものではなさそうだ。「遂初賦は劉歆の作である。歆はわかいころから詩書に通じ、文章をよくつづつた」などは、いかにも他人がかいたふうであつて、彼自身の手になるものとはかんながえにくい(じっさい、この序文はおおく『漢書』楚元王伝の記事と合致する)。ただ、他人がかいたものだとしても、この文は、「遂初賦」の内容を理解するうえで、ひじょうに重要な情報をふくんでいる。

これによると、この「遂初賦」は、劉歆が河内太守から五原太守にうつるうとしたとき、その途上でつくられたものようだ。じっさい、賦の本文をよむと、旅行の途中で見聞した景物、それから触発された故事、そして

その故事の連想からうまれた思いなどが叙されている（引用は略）。

この賦で注目したいのは、このときの劉歆の状況である。序文によると、このときの劉歆の旅は、みずから希望したものではなかった。移書で太常博士を非難したため、朝廷の大臣からにくまれ、「禍をさけるため」やむなく地方行きを志願したのだ。だから彼は、「志をえなかつた」（志意不得）。そして地方行きの途次、「現今に感じて往古に想いをいたし」て（感今思古。具体的には典故を列挙する）、のぞましからぬ旅をなげき、自分の所感をのべたわけである。このように「遂初賦」の執筆においては、「志意不得」なる感慨と、「感今思古」なる叙しかた、このふたつが存在していたのだった。

この「志意不得」と「感今思古」のふたつは、後続の紀行の賦においても、意識されていたようだ。たとえば、もういちど右の紀行の賦（芸文類聚）の標題をみてみよう。すると、行思、思婦、流寓、遊思、魂帰などのことばがあるのに気づく。これらの標題、いかにも「志意不得」（不遇感）や「感今思古」（典故列挙）と関連がありそうだし、またじっさいそうしたものがおおい。当時、旅（とくに都から地方への旅）というものは、ひとを悲観的、かつ感傷的にしやすかったのだろう。すると紀行の賦には、のぞましからぬ旅の途次、不遇感にさいなまれながら、景物をながめ故事を想起してゆく、という伝統があったのかも知れない。

たとえば「遂初賦」につづく、後漢の班彪「北征賦」をみてみよう。この賦は建武元年（二五）、ときに二十三歳だった班彪がつづつたものである。王莽新の滅亡時、赤眉の賊が長安に侵入しようとしたので、彼は難をさげようと、涼州に旅だったのだった。この賦は、つぎのようにじまる。

余遭世之顛覆兮、罹填塞之厄災。旧室滅以丘墟兮、曾不得乎少留。遂奮袂以北征兮、超絶迹而遠遊。朝発朝于長都兮、夕宿瓠谷之玄宮。歷雲門而反顧、望通天之崇宗。

私は、天下が転覆し、世が逼塞ひしやくする災禍にまきこまれた。

旧家はこわれて丘陵となり、しばらくもとどまることができなくなった。そこで決心して北方へゆこうとし、ひととわかれ遠地へ旅だったのである。まず朝に長安を馬車で発し、夕に瓠谷の甘泉に宿をとった。そして雲門をとおったとき後をふりかえり、たかくそびえる通天台をのぞみみたのだった。

冒頭に「天下が転覆し、世が逼塞ひしやくする災禍にまきこまれた」ので、やむなく北方に旅だった、とある。これで見られるように、この賦もやはり、「志意不得」（不遇感）という状況での旅だちであった。そしてこのあと（引用は略）では、旅途をたどりながら故事を想起し、公劉の詩をおもいだしたり、蒙恬の長城建設の非道さを慨嘆したり、また漢文帝の仁徳ぶりに感嘆したりしている。それらは「感今思古」（典故列挙）の叙法に該当しよう。

つづいて、その娘の曹昭の「東征賦」の場合はどうか。この賦、六十代後半だった彼女は、息子が陳留に赴任するので、それにしたがって洛陽を旅だったのである。そこで彼女は、父の「北征賦」を模しながら、旅途の思いを叙したのである。曹昭は、やはり冒頭でつぎのようにいう。

惟永初之有七兮、余隨子乎東征。時孟春之吉日兮、撰良辰而將行。乃拳趾而升輿兮、夕予宿乎偃師。遂去故而就新兮、志愴愴而懷悲。明發曙而不寐兮、心遲遲而有違。

永初七年（一一三）、私は我が子にしたがって東方へ旅にでた。ときあたかも初春の吉日、良辰をえらんで出発したのである。

私は、足をあげて馬車のうえにのぼり、夕方には偃師の地で宿をとった。故郷をさつてしらぬ地へゆくので、気分はおちこみ悲しみにとざされる。夜明けまでねむることができず、心はぐずぐずとし気分もはれることがない。

この旅は、息子の赴任につきそったもので、とくに曹昭自身が不幸な目にあつたわけではない。だが、客観的にはそうであっても、彼女が「気分はおちこみ悲しみにとざされる」とつづるからには、やはりたのしい旅ではなく、「志意不得」の心境だったのだろう。さらに後段（引用略）では、眼前をすぎゆく景物を叙し、胸中に想起する故事をつづつていて（感今思古）、やはり劉歆「遂初賦」の作風にそつた内容となつてゐる。

さらに、蕭繹がモデルにしたとおほしき、潘岳の「西征賦」もみてみよう。潘岳は、庇護者だつた楊駿がころされ、自身の身もあやうかつたが、かろうじて罪をまぬがれ、長安令に命じられた。この賦は、その洛陽から長安への旅を叙したものである。危難をまぬがれたばかりのせいにか、賦中の雰囲気は、叙任の喜びよりも、これ以上は罪にとわれまいとする、謹直な姿勢がつよいものになつてゐる。

潘岳はこの賦で、例によつて眼前の景物を叙し、胸中に想起する典故を列挙してゆくのだが（感今思古）、その叙しかたにいちじるしい特徴がある。それは、高橋和巳氏が「潘岳論」で指摘された、

……「潘岳の『西征賦』では「もっぱら、各代の帝王と將軍や宰相の人格を、その國家の興亡と結びつけて論じようとする。そして政治道義として、「禍いは天より下すに非ざる」ことを示そうとするのだが、叙述はその教訓性を超えて、つねにその話題に登つた國家の滅亡まで書いてしまつて、それを悲しむのである。

たとえば、桀王の驕淫と対照して武王の戒慎をたたえたと、それにつづいて、成王の建都、平王の遷都、そして十世を歴て赧王にいたりて東西に分裂し、秦に滅ぼされたところまで書かねばやまないものである。以下同様、その滅亡や破綻の相にまで筆をおよぼす、否定的な史実の羅列は、全体の印象を悲観的なものにせずにはおかない。いや、その全体的印象の悲観性こそ潘岳の言わんとしたところであるに相違ないと私は思う。

というものだ（『作品集』中国文学論集『三三八頁』）。つまり高橋氏によると、潘岳は典故を列挙するのだが、

そのさい、つねに「興起や繁栄だけでなく」滅亡や破綻まで叙し、それをかなしんでいる。そのためややもすれば、全体の印象が悲観的なものになっている、という。

このように高橋氏は、「西征賦」における典故内容の悲観性を強調されるのだが、しかしこれは、べつに特別なことではないとせねばならない。そもそも紀行の賦は、劉歆「遂初賦」以来の伝統として悲観性、すなわち不遇感（志意不得）があつてしかるべきものなのだ。したがって、「西征賦」の典故列挙（感今思古）が悲観にかたむきやすいのも、特段に異例な叙しかたではなく、伝統的書式への忠実さをしめすものとすべきだろう。

以上、『文選』に採録される紀行の賦三篇をみてきた。いずれも、紀行とはいっても、けつして物見遊山の気らくな旅ではなく、おおく「志をえなかつた」（志意不得）という感慨を有し、「現今に感じて往古に想いをいたし」（感今思古）た叙しかたになつていたことがわかつた。

これを要するに、紀行の賦で叙される旅は、おおむね、しいられた、のぞみからぬものだといつてよい。そしてその途次、作者は悲観的な感慨にふけりながら、景物をながめたり故事を想起したりするのである。いいかえれば、紀行の賦は、胸中を去来する悲観的な「感慨」と、眼前や脳裏をすぎゆく「景物・故事」、このふたつを交錯させながら展開してゆくといつてよい。おもつに、この悲観的「感慨」と「景物・故事」の交響、これが紀行の賦の本質であり、またその基本型なのだろう。

その意味で紀行の賦は、「景物・故事」だけでは不じゅうぶんであり、それから触発された悲観的「感慨」をまじえて、はじめて魅力的な作品となつてくるのである。ここらあたりが、たんなる遊記類とことなるところであり、また叙景の詩文とちがつた特徴だといつてよからう。

四 自信満々

こうした紀行の賦の基本型（のぞましからぬ旅の途上、悲観的な感慨にふけりながら、景物をながめ、故事を想起してゆく。「志意不得」と「感今思古」を基調とする）がわかれば、蕭繹「玄覽賦」の特徴も理解しやすくなるだろう。基本型とことなるところがあれば、おのずから、それがこの賦の特徴ということになるからである。そうした観点からみると、「玄覽賦」と基本型とのあいだに、おおきな違いがあることに、すぐ気がつくことだろう。それは、「玄覽賦」は「感今思古」（典故列挙）の叙法は存するものの、「志意不得」（不遇感）の感慨は有しておらず、むしろ逆の自慢するような発言がおおい、ということである。つまり「玄覽賦」中の蕭繹は、不遇感をつつたえるどころか、満々たる自信を有しているのだ。

たとえば、第四段のつぎのような部分がそれである。

飛余轡而西征、戍太真之旧营。鳴節鼓之金鐃、屯戎車於石城。

「戮滔天之封豕、
斬横海之長鯨。」

每輟書而歎息、景樹德之風声。

私はわが馬をはしらせて西にむかい、温嶠の旧营（建康の西北あたり）へいたった。そのさいは鼓の金鐃きんを奏させ、戦車を石城に駐屯させたのだ。そして天下にはびこる悪漢どもをころし、長鯨のごとき梟雄たちをまつぶたつにしてやろつと念じていた。

あのころの私は、いつも読書を中断しては嘆息し、徳望を樹立し名声をあげたい、とねがっていたものだったなあ。

これは天監十六年（五一七）、蕭繹十歳にして、琅邪・彭城太守となつていたときの記述である。この部分、三十八歳の蕭繹が、あのころはこうだったなあと回顧しているのだが、そのころ「天下にはびこる悪漢どもをころし、長鯨のごとき梟雄たちをまつぶたつ」にすることを念じていた、とのべていることに注目しよう。十歳時の彼が、ほんとうにそう念じていたかどうかは、わからない。だが、三十八歳の蕭繹はこうつづつたわけであり、つまり風雲の志をもっていた幼少時の自分を、かく自慢そうにふりかえっているのである。

そして、こうした少年時の志を自分は達成したと、「三十八歳時の」蕭繹はおもっていたようだ。つぎの記述は、十歳からとんで青年期、荊州刺史だったときの記述（第七段）である。

彼蠢爾之為鯁、伊憑凌而未靜。異黃巾於黑山、余喟然以指蹤、実濟寬而持猛。

非緑林於青嶺。

負歩光之文劍、麾靈琚之左展、白雲生而陣合、於是驅驢驕、
驚漢陽之夕景、光玳簪而右參、紅塵起而軍暗、命蹶張。

獍猛な連中が乱をおこし、あばれまくって国内の静穏をやぶった。こやつらは、黒山にはびこる黄巾の賊ともことなるし、青嶺に集結する緑林の悪漢どもともちがった連中だ。私はすばやく軍に指示をくだしたが、それは寛敵よろしきをえたものであった。

私が美麗な歩光の剣を背おつや、漢陽の夕日のなかできらめいた。そして戦車に左転するよう命じ、「兵士がさした」簪はかがやき右方にすすむ。白雲が生じたなかで対陣し、黄塵もうもつとして軍営はすすむ。ここにいて私は騎馬部隊を展開させ、弓手たちにも出撃を命じたのだ。

これは、戦いの記述だろう。ここで蕭繹は、自分の戦功をかたっている。「獍猛な連中が乱をおこし、あばれ

まくって国内の静穩をやぶった。黄巾とも緑林ともちがった悪漢どもだ。そこで、荊州刺史たる自分がたちあがり、軍にすばやく指示をくだしたが、それは寛敵よろしきをえたものだったと、いかにもほこらしげである。少年時に夢想した、「天下にはびこる悪漢どもをころし、長鯨のごとき梟雄たちをまつぶたつに」するという英雄的な行為を、自分はなしとげたのだ、といたいのだろう。

しかし、これは事実なのだろうか。陳志平・熊清元『蕭繹評伝』（上海古籍出版社 二〇一八）六十五頁によると、この記述は、中大通六年（五三九）、蕭繹二十七歳のときのことだという。梁廷はこの年、西魏の内紛に乗じて軍を南鄭に派遣し、そのさいに蕭繹に詔をくだして、諸軍を節度せしめたのである。そしてこの戦いは、結果的に梁軍の大勝でおわつたのだった。右は、そのときの戦役を叙したものらしい。

ところが『南史』巻五十をみると、この戦役のじっさいについて、つぎのようにかかれていているという。

出師南鄭、詔湘東王節度諸軍。之亨以司農卿為行台承制、途出本州北界、總督衆軍。杖節而西、樓船戈甲甚盛。……是行也、大致剋復、軍士有功皆録。

梁廷は軍を南鄭に派遣し、湘東王（蕭繹）に詔して諸軍を節度させた。

劉之亨は司農卿だったが、行台となって軍の指揮を代行した。そして、梁州の北界から出発するルートをとって、衆軍を集結させたのである。彼らは節符をにかけて西行したが、その樓船や兵士の甲冑姿は、たいへん堂々としていた。……之亨の軍が展開するや、おおいに西魏の軍をやぶって、軍士たちの功績はすべて記録されたのである。

これによると、実態としては梁廷（武帝）の命によって、劉之亨が軍の指揮を代行したのであり、蕭繹の節度なるものは、どうやら形式上のことだったようだ。その意味で、蕭繹が右のごとき戦闘を真に指揮したかどうか

は、かなりあやしいとせねばならない。

ただ、主観と客観がことなることは、だれしもあることだ。事実がどうだったかはべつとして、蕭繹にとつては、このときの戦いは、ほこるべき戦役体験だったにちがいない。だから、その体験を、「私が美麗な歩光の剣を背おつや、漢陽の夕日のなかできらめいた」云々と、印象的に叙したのだろう。

それにしても、この戦闘場面の描写はどうであろうか。あたかも英雄の勇敢な戦いぶりを、叙さんとするがこときである。こうした行文、他人でなく、自分がつづっているわけだから、この蕭繹という男、そうとうの強心臓、そうとうのナルシストだったといわねばならない。

蕭繹の強心臓ぶりは、こうした戦功を記述するときだけではない。おのが少年時の俊才ぶりを叙するときも、どうよつであつた。

皇覽揆余之忠誠、詔人謁於承明。

既撰州於淮海、

且作尹乎中京。

慕張生之謫伏、

珥金貂而待問、

兼三河及三輔、

挹辺延之励精。

鳴玉佩而趨庭。

總九緯乎九經。

天子（父の武帝）さまは、私の忠誠ぶりをお知りになられ、詔をくだして承明宮で謁見してくださいました。こうして私は、淮海を支配する揚州刺史代理となり、また建康の地をおさめる丹陽尹をおおせつかったものだ。

そこで私は、張敞の犯罪者摘発の法をまね、辺鳳と延篤の精励ぶりを模した。また金貂をくわえられ天子さまの対問をまち、玉佩をならしつづ「子として武帝の」訓導にしたがった。そうしながら建康と周辺

の地をおさめ、都中の治安もつかさどったものだったな。

これは、右よりすこしさかのぼり、普通三年（五二二）、十五歳の蕭繹が丹陽尹となったときの記述（第六段）である。冒頭から、「天子（父の武帝）さまは、私の忠誠ぶりをお知りになられ」と叙しているのに注意しよう。自分が武帝からいかに信頼されていたかを、強調している。そして自分は、武帝の期待にそうべく、訓導にしたがいながら、健康とその周辺をきちんとおさめた云々と、自画自賛しているのだ。

臆面もなくとは、こうした叙しかたをいうのではないか。十五歳の彼が、どれほどのことをなしたというのだろうか。紀行の賦の伝統たる「志意不得」（不遇感）はどこにいってしまったのだろうか。

こうした自慢した内容が、おおいためだろう。『芸文類聚』巻二十六では、この「玄覽賦」を「行旅」（紀行とおなじ）でなく、「言志」のなかにおさめている。この「言志」におさめられた賦は、

馮衍「顕志賦」、班固「幽通賦」、夏侯惇「懷忠賦」、曹植「玄暢賦」、劉楨「遂志賦」、丁儀「厲志賦」、韋誕「叙志賦」、棗據「表志賦」、潘尼「懷返賦」、傅咸「申懷賦」、曹攄「述志賦」、陸機「遂志賦」、陸機「懷士賦」、蕭繹「玄覽賦」、蕭繹「言志賦」

などである（一部略した）。これらの作、内容はさまざまだが、いずれも作者が自分の「志」をのべたものだ。とすれば、『類聚』の編者たちは、蕭繹の「玄覽賦」は、「志意不得」をのべた紀行の賦の仲間ではない。むしろ、おのが勇壮な「志」をかたった言志の賦に属するものだ、とみなしたのでろう。

この『類聚』の分類は、なかなか興味ぶかい。『類聚』の編者たちからみれば、この「玄覽賦」は、紀行の賦とはみなしがたかったのである。なぜ、みなしがたかったのか。それはやはりこの賦が、「志意不得」を伝統とする旧来の紀行の賦と、かなり様相がちがっていたからだろう（後述）。

五 国家的規模の自慢

さて、蕭繹「玄覽賦」には、「志意不得」（不遇感）の情緒は存しておらず、むしろ自慢ふう発言がおおいということを指摘してきた。ただ、右の自慢ふう発言は、「自分（蕭繹）は文武の両方で功績をあげ、天帝からの信頼もあつかった」という、いわば個人的なレベルでのものにすぎなかった。

だが、この賦における自慢は、そうした個人的なものだけでなく、いわば国家的規模というべき自慢もある。つまり自慢の規模が壮大なのだ。たとえば冒頭ちかく（第二段）からして、つぎのような誇大な梁朝賛美のことばがみえている。

惟天惟大、惟堯則之、粵我皇之握鏡、実乃神而乃聖。
 惟地惟厚、惟王国之。
 運璇枢而御宇、大矣広矣、無徳而称。
 俯輒齟於軒義、
 諒斗筭於子姒、
 括龍官乎鳳紀、
 高鴻名於万祀。
 陳六聯於八則、
 弘九職於三令、
 包河図与洛書、
 超大徳於百王、

天は偉大であり、堯はその天にしたがって天下をおさめ、地は深厚であり、「後代の」王たちはこの地に国をさだめたのだった。

ここに、わが梁の皇帝（蕭衍）が受命するや、神秘をおこない聖恩をひろめられた。八則にのっとりて政務をとられ、三令にしたがって職掌を実行させた。星座の運行にしたがって政治をおこない、渾天儀で天の運行をご覧になった。なんと偉大で、なんと広遠なことが。それでも民衆はそうと気づかず、称賛の声もおこらぬ。だがじつさいは、黄帝や伏羲よりもすぐれ、夏・殷もものかずではなかった。河図と

洛書の出現や、太皞たいこうや少皞せうこうの故事をあわせたほどであった。その徳望ぶりは百王よりもたかく、名声は万年にひびきわたるほどであった。

『我皇』（父の梁武帝）のすばらしさをたたえた部分である。まず、天命をさすけられた「我皇」は、「神秘をおこない聖恩をひろめられた」と、『尚書』大禹謨の典故をもちいてたえる。以下、いちいちの解説は略するが、『詩』『周礼』『易』『論語』『左氏伝』など経書由来のことは引用して、父帝がいかによい帝王であるかを強調してゆく。「黄帝や伏羲ふくぎよりもすぐれ、夏・殷いんもものかずではなかった」の発言にいたっては、諛辞にちかといわねばなるまい。

ここで注目したいのは、「我皇」ということばである。この「我皇」は、もちろん梁武帝をさしているが、「我」字をつけることによって、「わが皇帝、わが梁室、そして「梁室の一員たる」「自分の父うえ」の意もふくんでくる。とすればこの部分には、ただ父帝を賛美するだけでなく、みずから（梁室の一員）をほこるニュアンスも存することになる。蕭繹はいわば、父帝や梁室賛美に便乗して、さりげなくおのが血筋も自慢しているのである。同種の事例を、もう一例ひこう。十九歳から荊州刺史をつとめてきた蕭繹は、三十二歳のとき、その任をおえて建康に帰還した。そして護軍將軍、石頭戍軍事という官位をさすけられるのだが、その建康滞在中、どうやら彼は、武帝がおこなった郊禘こうていの祭に参加したようだ。その祭の場面を、第八段でつぎのようにつづっている。

於斯時也、天子郊禘於眞丘、高玉簡於東漢、奏蒼璧而服大裘。

邁金版於西周、

樂有雲翹之舞、設黃琮而礼地、望方澤乎神州、

性非鹵菜之牛。

節会咸池之瑄、

冕無繁露之旒。

觀三農乎九穀、薦黍稷之種稷。

「命甸師而清塵、

敬青壇而致虞、

詔封人而出宿。

「動翠耜而祈穀。

このとき、天子さまは員丘にて、郊禘しやうていの祭祀をとりおこなわれた。玉簡を東漢のときよりたかくささげ、金版を西周のときより豪勢にされた。そして黒璧を奏し、質素な大裘を身にまとわれた。このときの樂舞は雲翹うんぎょうの舞だったが、犠牲は鹵栗なんりつの牛ではなかった。黄玉をささげて地に敬礼し、方澤の壇を京師からお望みになられた。樂節は「黄帝の」咸池にかない、冕べんは旒りゅうのすくないものだった。

九穀の実りによって土地のよしあしを觀察し、早生晩生の黍稷をささげられた。そして甸師てんしの官に命じて道の塵をきよめさせ、封人の官に詔して外を守護させた。青壇に敬礼して山川の恵みを祈願し、翠耜すいしをうごかして豊作をお祈りされたのである。

ここでも蕭繹は、武帝がとりおこなった郊禘の祭のようすを、『周礼』や『尚書』に由来する古語を多用しながら、いかめしく叙している。「東漢のときよりたかく」「西周のときより豪勢に」などは、伝統を意識したがためのの発言だろう。このあたり、蕭繹は個人的な立場というより、いわば国家的な見地から郊禘の祭祀を叙し、その典礼の篤実さや質素さを強調している。こうした公的立場での発言は、過去の紀行賦にはないものであった。

この種の祭祀の叙述、現代の我われがよんでも、よく理解できないのだが、おそらく当時の人びとも、ピンとこなかったのではないが、だがそれでも、かまわないのだろう。当時、南朝の梁廷（蕭繹もその一員）は、軍事力でまさる北朝に対し、礼楽の保持や充実さを強調して、おのが正統性を主張していた。蕭繹も、そうした状況を意識すればこそ、読者がわかるうがわかるまいが、かかる古風な儀礼をていねいに叙したのだろう。これも、「盛大な礼楽の挙行 梁廷・武帝贊美」その一員たる「自分の自慢」の構図だとかんがえてよい。

そうした意識の余波だろう、この「玄覽賦」中の自然描写も、ややもすれば、規模のおおきさや雄勁さを強調する方向にかたむきやすい。この「玄覽賦」は紀行の賦であるため、旅途の自然や景物を叙することがおおいが、そこでの描写たるや、「平穩かつ静かなものでなく」じつに壮大にして雄勁なのだ。たとえば蕭繹が江州刺史に任じられて、当地を旅したときの描写（第九段）をみてみよう。

蕭繹はじめに、「何ぞ蠡川れいせんの浩浩とし、而して匡岫きやうしやうの蒼蒼たるや」と、山河の壮大さに感嘆のことはを発する。「蠡川」と「匡岫」とは江州の名所で、彭蠡湖（いまの鄱陽湖）と廬山のことである。このことばにつつき、蕭繹は匡岫（廬山）の険しさをのべて、

其匡岫也、盤紆峭崿、峻極于天、干霄秀出、岑嶽崎嶇、烏兔蔽虧、哈呀豁聞、背原面野。

嶮嶮鬱律。

噴飛流於天末、聳高館於雲中、

鼓雷霆於巖下、聯藁祠於星社。

江州の匡岫は、うねうねとして聳立し、けわしくそりたっている。その高さは天にとどき、雲をつきぬけるかのよう。たかだかとし、けわしいので、日や月は半分かくれてしまうほどだ。その峡谷も巨大で、がらんとし、平原を背にし広野に面する。そして流水を天のはてまで噴出し、雷鳴は巖下にひびきわたる。また山中には、雲のなかで高館がそびえたち、靈星のしたに祠がたらなっている。

という。つづいて、蠡川のようにすつぎのように叙する。

爾其彭蠡際天、用長百川。

沸渭渝溢、

大則浩汗滉漾、

激淡連延。

細則澆灌滂潏。

それから彭蠡湖たるや、天のはてまでつづくかのようで、百川の長というべき存在である。とうとうたるなれば、あふれんばかり、湖水はたゆたって、どこまでもつづくかのよう。また「そこらながれでる」大流は勢いよくながれてひろがり、細流は周囲をうるおしながらサラサラとながれゆく。

ここでの盧山や彭蠡の描写は、平板なものではない。山岳も湖水も、平穩かつ靜的なたずまいではなく、雄勁かつダイナミックだ。山はあくまでたかく、けわしく、「高さは天にとどき、雲をつきぬけるかのよう」であるし、湖も壮大で、「天のはてまでつづくかのようで、百川の長というべき存在」なのである。こうした自然の雄勁さも、国家的規模の自慢なのだろう。

とくに注目したいのは、形容詞ふうの語句の特異さだ。「盤紆」「嶮嶮」「嶮嶮」「鬱律」「岑嶽」「崎嶇」「沸渭」「滄溢」「浩汗」「滉漾」「激淡」「連延」「澆灌」「潺湲」など。これらの字句は、山の高峻さや川の壮大さを表現しているのだが、連綿字や双声、疊韻の語がめだつ。しかも、山ヘンやサンズイをつかった奇字が、連続しているのにも注意しよう。

同種の叙しかたとして、さらに興味ぶかいのは、景物、なかでも果樹や草木の描きかたである。蕭繹は、果樹や草木の名をいちいちあげてゆくのだが、その挙例のしかたが、じつに饒舌にして情熱的なのである。たとえば、荊州の植生を叙した第七段に、つぎのような記述がある。

爾乃樹之榛栗、椅桐梓漆。三巴黃甘、桃蔭井而成蹊。蟬鳴枝而候稻、
 千戸朱橘、萍浮江而泛実。范飛冠而吐蜜、
 復有 水底石髮、書帶新抽、反魂長生、金塩玉鼓、
 山筋地骨、屏風牙髡、靈壽女貞、堯韭舜菜。

「交譲之目、忘憂長樂、竹則」 簣、簣、綠籜、
 代謝之名、桃杷鼓箏。 交戰策皮。

さらに植栽としては、榛、栗、椅、桐、梓、漆がある。また三巴の黄甘、千戸の朱橘が生じている。桃樹は井戸をおおつて蹊をなし、萍草は江水にうかび実もただよっている。蟬は枝にないて、稲がみのるのをまち、蜂は冠あたりとびまわつて、蜜をためている。水底にはこげが生じ、山麓には地骨がはえている。書帯があらたにとれ、屏風は芽がでてきているぞ。また反魂や長生、靈壽や女貞の樹木が生じているし、金塩、玉歧、堯韭、舜采などの葉草もあるな。

交譲の種類、代謝の名前としては、忘憂、長樂、桃杷、鼓箏などがある。さらに竹の種類としては、簣、籜、綠籜、交戰、策皮なども生じているぞ。

これは、蕭繹が赴任した渚宮（江陵）の様子を叙した部分である。蕭繹は、その地の植生を觀察してゆくのだが、「榛、栗、椅、桐、梓、漆がある。また三巴の黄甘、千戸の朱橘が生じている」などと、果樹や草木の名をこまかくあげている。ただ「たくさんの果樹や草木が生じている」などとせず、いちいちその名を言あげしているのである。

これはおそらく、いちいち名をかぞえあげること、江陵（さらに梁）の地の物産のゆたかさを強調しようとしているのだらう。つまり、「梁のこの江陵の地には、こんな果樹も生じているし、あんな草木も上げている。あれもあるし、これもあるぞ。なんとゆたかではないか、なんと広大ではないか」と自慢しているのだ。だから列挙の意欲も、エネルギーシユになるのだらう。

六 漢賦ふう雄大さ

ところで、右の連綿字や双声、疊韻の多用や饒舌な事物の列挙をみると、すぐなにかの叙法が、おもいだされるだろう。そうである。漢代大賦の叙法、これに似ているのだ。つまり蕭繹は、漢代大賦、たとえば司馬相如「子虚上林賦」などの叙法を脳裏につかべ、それに模した行文をつづっているのである。

このことを指摘したのが、袁丁「意氣貫注 齊梁逸格——読梁元帝蕭繹玄覽賦」(『文史知識』二〇一五) という論文である。袁丁氏は、この御論で両者の相関をみぬいたうえで、「玄覽賦」を紀行でなく、漢代大賦のながれのなかに位置づけようとされている。袁丁氏によれば、こつした描写のしかた、なかでも右にあげた「滂澗ふついでん溢し、激澗げん連延す」(第九段)や「之これに樹こつるは榛栗、椅桐梓漆」(第七段)の叙法は、枚乘「七発」、司馬相如「子虚上林賦」、班固「西都賦」、張衡「二京賦」などからの影響をおもわせるといふ。そうだとすれば、右でみた国家的規模の自慢や規模壮大な自然描写も、漢賦を模した王朝賛美であり、叙景であつたといつてよからう。さらに袁丁氏は、そもそも蕭繹があたらしい官位をえて、梁の国内をめぐることじたいが、漢賦ふうの創作態度に通じるものだという。ここでいう漢賦の創作態度というのは、袁氏によれば、つぎのようなものをさす。

司馬相如為上林子虚賦、意思蕭散、不復与外事相関。控引天地、錯綜古今、忽然如睡、煥然而興。幾百日而後成。

司馬相如が「子虚上林賦」をつくるにさいしては、彼は精神を冷静にたもち、外事との關係をいっさいたちきつた。そして「心中に」天地をひきよせ、古今に想いをはせ、急にねむつたかとおもえば、はっ

きりと目ざめたりした。この状態が何百日かつついて、ようやく完成できたのである。

相如曰、合羣組以成文、列錦繡而為質。一絳一緯、一宮一商。此賦之跡也。賦家之心、苞括宇宙、總覽人物、

「賦の創作をとわれた」司馬相如はこたえた。「くみひもをあわせて模様（文飾）をつくり、錦繡をつらねて生地（内容）にするようなものだ。たて糸をとおせば、つぎによこ糸をとおす。ある字を宮の音にすれば、つぎの字は商の音とする。これが賦の作りかたである。賦家の精神たるや、宇宙をつつみこみ、人や事物のありようをみとおすものでなければならぬ」。

これはともに、司馬相如の賦作にかかわる逸話である。この逸話、ともに「小説に属する」『西京雜記』巻二におさめられているので、いささか信憑性には欠けるきらいはあるが、それでも古来、困難な創作にたちむかう賦家の意気こみをしめたものとして、よくとりあげられてきた。

袁丁氏が着目されたのは、ここの「心中に」天地をひきよせ、古今に想いをはせる」と、「賦家の精神たるや、宇宙をつつみこみ、人や事物のありようをみとおす」という、かなり大仰かつ誇大なことばである。氏によれば、蕭繹はこのときまで、建康を拠点としながら、琅邪、彭城、会稽、丹陽、荊州、江州などの地を、遠近さまざま赴任し、へめぐってきている。この、中国の東西を横断する行為は、巨大な規模での空間的移動だといってよい。そうした巨大な移動を叙した「玄覽賦」は、天地をひきよせ、宇宙をつつみこもうとした漢代賦家の精神にはおよばぬものの、それでも南朝文学ではめずらしい、規模雄大さを有するものだ。その意味で、蕭繹「玄覽賦」の創作は、「司馬相如などの」漢代賦家の態度にちかいものである——と。

こうした、「玄覽賦」を漢賦に比そうとする袁丁氏の見かたは、けっして荒唐無稽なものではない。「志意不得

(不遇感)がなく、全篇に自信や自賛の情がみなぎっていること、壮大な自然描写や詳細な事物列挙がなされていること、連綿字や双声、疊韻、さらに山へんやサンズイをつかった奇字を多用すること——これらの「玄覽賦」の特徴は、たしかに漢賦への接近を示唆するものだ(ただし漢賦には、「感今思古」(故事列挙)の叙法は存しない)。その意味では、「玄覽賦」の叙法は、六朝ふうの繊細さを追求したものでなく、漢賦ふう壮大さをめざしたものだといえよう。

「玄覽賦」と漢賦との相関では、もうひとつ注目したい点がある。それは、賦中における作者の位置づけだ。

司馬相如の「子虚上林賦」の場合では、賦家(司馬相如)自身は後面にひっこみ、子虚や烏有先生が長広舌をふるっていた。そして、楚の雲夢沢や長安の上林苑の広大さ、豊麗さを強調しつつ、漢王朝の偉大さを賛美していた。それに対し「玄覽賦」では、作者の蕭繹自身が前面にでている。そして彼自身が、梁朝の偉大さを叙して、ほめたたえていた。

ただ、右でも指摘したように、かく叙している蕭繹そのひとも、ほめられるべき梁室の一員なのである。それゆえ、「玄覽賦」における梁朝賛美のことは、けっきょく、蕭繹そのひとにむけられているようにも、とれてしまう。そのため、この賦の自画自賛ふう性格が、いっそうつよまってくるのだ。漢賦ふうの壮大な叙述の奥から、「ううだ。オレはすごいだろう」という声が、かすかにきこえてくるかのようである。そうした作だったからこそ、蕭繹は、自分でもこの賦が気に入っていたのだろう。

私見によれば、そうした自画自賛ふう叙しかたが、蔡大宝から「野心あり」とおもわれてしまったのだとおもう。江陵訪問をおえて、蕭簪のもとにかえった大宝は、主君の蕭簪に「湘東(蕭繹)は必ず異図有り。禍乱將に作らんとす」と忠告したという(前出)。それは、この「玄覽賦」の内容のなかに、右のような自信や自画自賛

ぶりを感じたからだろう。こうした自信や自賛は、すぐ政治的野心に変化するものだ。異図を有し、禍乱をひきおこしそう——他人にそうおもわせる危つさを、「玄覽賦」は有していたのである。その意味で、「玄覽賦」に蕭繹の野心をみぬいた大宝の直感、じつに秀逸だったといつてよい。

七 二つた煮

ところがである。

これほど自信や意欲をにじませながら、蕭繹はなぜか篇末では、奇妙なほどつつましいことをのべている。すなわち、蕭繹は賦の末尾（第十段）で、「文人として世をおえたい」という意外な希望をのべて、この巨大な作をとじているのである。

幼墳藉以自娛、迄方今而不渝。

雲氣芝英之簡、

緘乎蒸栗之帙、

擬河獻之留真、

懸針倒薤之書。

飾乎酸棗之珠。

希淳儒之席珍。

……嗟今来而古往、方絶筆於獲麟。

私は幼時より読書するのが好きだったが、それは現在もかわることはない。雲氣や芝英でかかれた文書や、懸針や倒薤でかかれた書物があれば、それを黄色の書帙でおおったり、酸棗の珠でかざったりしている。また河獻王のように善本を収集したり、儒者の学識を尊敬したりもしている。……私は、古今の悠久の時間のながれに思いをはせながら、著述しながら世をおえたいと念じているのだよ。

最後の「嗟今来而古往、方絶筆於獲麟」、前句は潘岳「西征賦」の「迺嗔然として歎じて曰く、古往今来、

遡^はかなるかな悠なるかな」をふまえ、下句は「左氏伝」哀公十四年の獲麟の故事をふまえている。要するに蕭繹は、古今の歴史に思いをよせながら、生涯の最期まで筆をとりつづけたい、とかたっているのである。

たしかに、蕭繹の著述ずきは、うそではない。彼は十四歳のときに片目を失明したが、学問はやめなかった。自分で書をよめかわりに、読みあげ係をそばにおき、昼夜をとわず読誦をききつづけた。その結果、彼は博大な知識を身につけ、おおくの著述をかいてきたのである。その意味で、生涯の最期まで筆をとりつづけたいというのは、もっともな発言だといえなくはない。

しかし、蕭繹はそれ以上に、つよい政治的野心をもっていた。じっさい、この賦をかいて三年後、侯景の乱が勃発するや、彼は悪鬼のごとき人間に変貌した。そして、自分が梁の帝位につかんとして、叛將の侯景はもとより、ライバルになりうる親族をつぎつぎと殺害し、死屍累累の修羅道をあゆんでいったのだった。

そうした彼の強烈な野心は、この「玄覽賦」のなかでも、すでにチラチラみえていた。「天下にはびこる悪漢どもをころし、長鯨のごとき梟雄たちをまつぶたつにしてやる」と念じていた「や、「天子（父の武帝）さまは、私の忠誠ぶりをお知りになられ、詔をくだして承明宮で謁見してください」がそれだ。かく、おのが戦功や「父帝からの」信頼^{しんらい}ぶりを自慢するところに、彼の功名心や野心がかいまみえている。どうだ、すごいだろうと、いわんばかりだった。

ところが、そうした彼が、この賦の末尾でとつぜん、著述に専念しながら世をおえたいなどという、つつましかかな希望をかたっているのである。ここまで「玄覽賦」をよみすすんできた者は、野心勃勃だった蕭繹の意外な発言に、アレッとおどろいてしまつことだろう。この著述の希望は、これ以前の「賦中の」発言と、一致しないからである。

ただ、この「玄覽賦」を細心によんでみると、この種の意外な発言をすることは、ここ以前でも、ないではなかったのだ。たとえば、つぎのような発言がそれである。

觀進退於我生、每篤靖而居貞。 羞為金谷之富、

不矯石閭之清。

每鞠躬而遵節、藉王道之既平。 貴靜者人所便、予得之於自然。

わが半生の行動をふりかえれば、私は、つねに篤実であり正道をあゆんできた。石崇せきしゅうのごとき大金もちになろうとおもわず、きよらかな神仙の志もまげようとしなかった。つねに身をつつしんで節度をまもり、父上のやすらかな王道のおかげをこうむってきた。しずかな生活はひとがのぞむものだが、私はこれを自然に身につけることができたのだ。

これは、末尾の第十段にあることは、蕭繹が自己の半生を回顧してかたった場面である。自分は「つねに篤実であり正道をあゆんできた」と、堅実な生きかたをのべ、また「しずかな生活はひとがのぞむものだが、私はこれを自然に身につけることができた」と神妙なことをのべている。これも、「野心家の彼にしては」予想外に実直なことばであり、また自己認識だといつてよからう。

矜猿鳴之抱木、 每愀然而作色、 閱放麕而興憫、
傷兔走之依株。 方載馳而軫軼。 对乱鱗而動惻。

樹にしがみついて命乞いする猿を気のだくにおもい、木の株に激突して死んだ兔をいたんだものだ。そのたびにはっと顔色をかえて、すすむ馬車の向きをかえたものだよ。また子鹿をみては、不憫だなおもい、小魚を目にしては、憐れみの情をおこしたものだっただな。

これは、反乱を鎮圧したあと、自分はこうだったとのべた一節である（第七段）。ここの猿や兔、子鹿や小魚は、もちろん敵軍の兵士の喩だろう。ここでも蕭繹は、彼らしくなく、小動物（敵の兵士）たちを「気のどくにおもい」「いたん」でいる。そして「はっと顔色をかえて、すすむ馬車の向きをかえた」という。自分は、戦場において勇猛だっただけでなく、命乞いする者やよいい者をあわれみ、ゆるしてやるだけの大度量の持ち主だった、といたいのだろう。だが彼はほんとうに、かく相手の兵士を同情し、いたわったのだろうか。彼の生涯にみえる、残虐非道な行いをしる者からすれば、じつにふしぎな発言にうつり、いささかの混乱さえおぼえてしまうのである。

「向秋野之蒼茫、散歸雲之鬱翁、聞羌笛之哀怨、慘余袂兮淚成行、

对寒江之幽咽。吐長風之颯颯。聽胡笳之悽切。攀余轅兮不忍別。

広漠たる秋の平原をのぞみ、すすりなく寒江のながれにむかった。すると、わきおこる行雲はちりぢりとなり、そよたる風もふきよせてきた。そうしたなか、哀切な羌笛きやうてふの響きをきき、さみしげな胡笳こかの音に耳をかたむける。袖をにぎって涙をながし、馬上のひとつとなっても、わかれがたい気分だったなあ。

これは、蕭繹が荊州をさつて、建康にかえろうとしたときの記述である（第七段）。刺史として十二年以上をすごした地なので、すっかり感傷的になって、「哀切な羌笛の響きをきき、さみしげな胡笳の音に耳をかたむける」。さらに「涙をながし」「わかれがたい気分だった」などというのは、修辭的な慣用句をつかっただけかもしれないが、彼の繊細さを彷彿させるものではあろう。

このように、「玄覽賦」を細心によんでみると、野心、自慢、自賛などとはことなる、繊細だったり情けぶかったりする側面が、うかがえてくるのである。かくみてみると、篇末における著述への希望は、そうした意外

な発言のひとつにすぎないというべきだろう。たまたま末尾に布置された結論ふう発言だったので、目だつてしまつたのである。

じつは、この賦の思想的な発言においても、これと同種の辻褄のあわぬ記述が、ときどき出現してきている。たとえば、蕭繹は第十段で、

擬河献之留真、

希淳儒之席珍。

また河献王のように善本を収集したり、儒者の学識を尊敬したりもしている。

とかがたつて、経書や儒者への尊敬の情を表明していた（前引）。ところが、第五段では、

睇三茅之靈秘、

懐九転之仙記。

私さんぼうじんは、三茅君（神仙）の秘籍をよみ、煉丹を叙した仙書にあこがれた。また紫台石室の文書、黒い題簽や

銀函の書物も手もとにある。

とのべ、神仙へのあこがれをかたつていているのである。⁽⁵⁾

さらに第六段では、

未有祇園之右、

斉之仁壽……

紫紺之堂臨水、
青蓮之台帶風。

「漢武帝のころの壮大な宮殿も、父帝のおつくりになつた」祇園精舎よりりっぱとはいえず、仁愛ぶりの点でも「父帝とは」比較にならぬものであった。……この建康の地には、紫紺色の仏堂が水辺にならびた

ち、「仏像が鎮座する」青蓮の台座も風にゆれていることだ。

とのべ、祇園精舎や紫紺色の仏堂、青蓮の台座のうるわしさをかたっている。ここの祇園精舎は、もちろん僧院だが、「紫紺の堂」「青蓮の台」も、父の梁武帝が建立した仏道修行の建物をさしているのである。

このように、蕭繹はこの賦のなかで、儒、道、仏の三教へ、ひとしく敬意をはらっているのだ。こうした自在な思想のありかたは、この時期のひとつにはめずらしくないのだが、それでも一篇のなかに、こうした語句があるのは奇妙に感じられ、混乱したような印象が否定しがたい。こうした記述は、やはり厳密にいえば、矛盾というべきではなからうか。

これを要するに、この「玄覽賦」には、雑多な要素（紀行、故事列挙、立身、戦功、梁朝賛美、漢賦模擬、読書、文学、著述）や矛盾した自己認識（皇族、英雄、武人、憐れみぶかい、著述ずき、文人）、そして混乱した思想傾向（儒教、玄学、仏教）などが、こちゃこちゃと、そしてちくはくはくはく、いりまじっているのである。比的にいえば、いろいろな材料をほうりこんだ、こった煮ぶつの作といえようか。

なぜ、こんなこった煮なになってしまったのか。

それはおそらく、蕭繹のつよい自己顕示欲が、そうさせたのだらう。彼は「性として矯しつぽり飾るを好む」（『南史』本紀）、つまり体面をかざるのがたいすきな男だった。だから蕭繹はこの賦でも、自分は文武の両道に通じているのだぞと、俊英ぶりを誇示したかったのだ。

つまり蕭繹は、この賦でこついいたかったのだらう。自分は高貴な梁室の一員であり、天帝からも信用されているぞ。戦場で功績をたてたこともあるし、地方官としてもがんばってきた。またつよいだけでなく、思いやりや憐れみぶかさも有しているぞ。読書もすきだし、著述にも熱心だ。また儒教、玄学、仏教のどれにも通じてい

る。このように、自分はあれもこれも、なんでもできる男であるぞ、と。

そうした蕭繹からみれば、こつた煮だなどといわれる筋合いは、なかったにちがいない。なにしろ、自分はじつさいに、皇族でもあり、英雄でもあり、憐れみぶかい人間でもあり、また三教に通じた文人でもあるのだ。だから、べつに矛盾したことなどは叙していない——。こうした欲ばった、そしてエネルギーシユな自賛意欲が、「玄覽賦」をこつた煮ふうの内容にし、そして混乱した印象をあたえてしまったのだった。

八 紀行から言志へ

さて、「玄覽賦」が有する内容について、気づいたことをのべてきた。もうそろそろ、結論にすすんでもよからう。この蕭繹「玄覽賦」という巨大な賦は、文学史上でみたとき、いつたいいかに位置づけられ、いかに評されるべきだろうか。

まず、「玄覽賦」の位置づけからかんがえてみよう。

本稿ではこれまで、この賦は紀行の賦に属するとのべ、そのようにあつてきた。ところが、かく「玄覽賦」の内容をみてきたとき、どうやら、その見かたは修正する必要があるようだ。

というのは、「玄覽賦」は、紀行の賦の特徴というべき「志意不得」（不遇感）と「感今思古」（典故列挙）のうち、前者の不遇感をまったく有していないからである。いや、もっていないどころか、その真逆といふべき自慢や野心ふう発言を、賦中で得意げに叙していた。そうした発言をもつ「玄覽賦」は、不遇感にさいなまれながら、景物をながめ故事を想起してゆく紀行の賦とは、あいられないものだといわざるをえない。

では「玄覽賦」は、いかなる賦に属するとすべきだろうか。私は、形式的には紀行の賦だが、実態としては、言志の賦だとみなすべきだとも思う。じっさい、『芸文類聚』は巻二十六「言志」のなかに、この「玄覽賦」を採録していた（前出）。つまり「類聚」の編者たちは、この賦を紀行の賦ではなく、おのが志をかたった言志の賦の一篇だとみなしたのである。私も、その考えに賛同したいとも思う。

この蕭繹の賦、標題が「玄覽」、つまり「梁内の地を、巡遊して」じっくり観察するの意であること、じっさい内容的に旅途を叙していること、冒頭で潘岳「西征賦」を模していること——などからすれば、おそらく自分（蕭繹）では、紀行の賦をかこうとしたのだろう。そして完成したあとも、「自分は紀行の賦をかいた」とおもっていたのだろう。⁽⁶⁾

にもかかわらず、後世においては、この賦は紀行の賦とはみとめがたい、と判断されてしまったのだ。「類聚」巻二十六。これは、「玄覽賦」固有の事情（不遇感をもたぬ）もさることながら、紀行の賦じたいの変質もあつたのではあるまいか。すなわち、ジャンルの発展にともなつて必然的におこる実体的変質、それがここでも発生したのだとおもわれる。

その紀行の賦の変質は、「玄覽賦」においてとつぜん発生したものではあるまい。おそらく、蕭繹以前から、すこしずつ変化してきていたのだろう。たとえば、紀行の賦とされる謝靈運「帰塗賦」（『類聚』は「行旅」の賦に分類する）をみてみると、その序文につきのようなことがある。

昔文章之士、多作行旅賦。或欣在觀國、或愴在斥徒、或述職邦邑、或羈役戎陣。事由於外、興不自己。雖高才可推、求懷未愜。今量分告退、反身草沢。経塗履運、用感其心。

むかし文学の士は、おおく紀行の賦をつくつた。彼らはその賦中で、良俗の国々をみてよろこんだり、

左遷をかなしんだり、地方赴任を報告したり、戦地への出征を叙したりしている。だが、それらの賦作は外的原因によったものであり、自分から興趣きょうしゆを感じたものではなかった。だから彼らの才腕はよく理解できたが、その心情まではよくわからなかった。

ところが今回、私は自分の本分をして引退することになり、隠棲の地へかえることになった。その旅をつづけ時がたつうちに、先人の心情に共感できるようになったのである。

ここで霊運は、行旅の賦（紀行の賦）について、「左遷をかなしんだり、地方赴任を報告したり」とかたるとともに、「良俗の国々をみてよろこんだり」とも叙している。つまり霊運は、紀行の賦には「欣」（よろこぶ、の意）の要素もありえる、とおもっていたようなのだ。これは、「志意不得」（不遇感）を重視する従前の見かたとは、ことなつたものだといわねばならない。じつさい、この謝霊運「帰塗賦」の本文をよんでみると、「現存するかぎりでは」美麗な山水をみてよろこぶ内容ばかりであつて、「志意不得」も「感今思古」も、ほとんど叙されていないのである。

このように、「帰塗賦」においては、「志意不得」と「感今思古」の基本型にしたがうべきだという考えは、あまりつよくなかつたようだ。そのためこの賦は、不遇感どころか、山水の美をよろこぶ、叙景中心の作になっているのである。こうした紀行賦ジャンルの変質について、褚斌杰『中国古代文体概論』（増訂本 北京大学出版社 一九九〇）は、つぎのように説明している。

各ジャンルは、ほんらい規範性と安定性を有しているが、それは発展の途上において、つねに変化し、更新し、拡大している。そのためジャンルは、いつも安定と変革、規範と反規範のなかに位置することになる。これが、ジャンル史上、しばしば変体が出現する原因でもあるのだ。この変体は、作家の偶発的な試みの結

果であつたり、新様式の萌芽であつたりするのだが、けつきよく、こうしたジャンルの発展は、いつもその分類にあたらしい課題をもたらすことになる。これもまた、ジャンルの分類に複雑さや多様性をひきおこす原因になるのである。(拙訳『中国の六朝 ジャンルによる文学史』三〇三頁)

褚氏によると、ジャンルというものは、時代によつてすこしずつ変化し、更新し、拡大してゆくものであり、いつも安定と変革、規範と反規範のなかに位置しているのだという。かくかんがえれば、紀行の賦もその例にもれず、発展の途上において変化し、各様の「変体」や「あたらしい課題」をうみだしていったのだらう。

すなわち、紀行の賦では当初(劉歆)「遂初賦」のとき、「志意不得」と「感今思古」を重視すべし、という考えが存していた。班彪や曹昭、潘岳らは、それを伝統だと意識してつづつてきた。ところが謝靈運のころになると、そうした伝統にのっとりとういう意識がとぼしくなった。そのため、基本型に敬意を払いつつも、しかしより自由な「変体」が、つづられるようになっていった——ということなのだらう。

ただ、その「変体」ぶりが過度となり、基本型から大幅にはずれてくると、分類に「あたらしい課題」が発生し、ジャンルの見なおしをせざるをえなくなるわけだ。たとえば、「志意不得」(不遇感)が過度にわたつてくれれば、哀傷や士不遇の賦に属させようということになるし、「感今思古」(典故列举)がつよくなりすぎれば、詠史の賦に分類すべしとなる、というふうな。

これを具体的にみたならば、謝靈運「帰塗賦」は、「類聚」ではなお、「行旅」(紀行とおなじ)の賦に属させられている。ということは、「これはまだ、基本型からのずれがちいさい」と判断されたのだらう。ところが、蕭繹「玄覽賦」になると、言志に分類されてしまった。つまり「類聚」の編者たちは、「この賦は紀行よりも、言志の要素がつよい」と判断したわけだ。おそらく、「玄覽賦」中の自慢や野心ふう発言が、「志」をかたった言

志の賦にちかい、とおもわれたのだろう。そして私は、この『類聚』編者の判断を妥当だとおもつのである。

九 あざとい印象

つぎに、この「玄覽賦」は、いかに評価されるべきだろうか。

まず文章としては、上乘の作だといえよう。修辞的彫琢がほどこされた、たいへん巧緻な美文である。その彫琢ぶりを数字でしめしてみれば、対偶率65%、四六率94%、声律率76%となる。これはすばらしい数字であり、六朝でも屈指の修辞的洗練ぶりだといつてよい。

たとえば、六朝きつての名篇といつべき陸機「文賦」、蕭統「文選序」、徐陵「玉台新詠序」などと比較してみよう。

玉台新詠序			玄覽賦	
文選序	288	162	651	句数
文賦	118	156	424	対偶
	130	159	611	四六
	39	50	160	声律
	62	96	65	対偶率
	69	98	94	四六率
	72	96	76	声律率
東小結	西大関	東横綱	西大関	地位

となる。「玉台新詠序」にはおよばぬものの、「文賦」や「文選序」よりも、たかいパーセントを有している。もしこの賦を、かつて拙著『六朝文評価の研究』で作成した美文番付(同書五八一頁)のうえにあげたなら、陸機「文賦」をおしのけて、西大関の地位をしめることになる。これによって、「玄覽賦」の修辞レベルが、いかにたかいものであるかが、了解していただけるだろう。

いっぽう、内容面ではいかに評価されるべきだろうか。これについては、いくつかの欠陥、つまり具合のわるいことが指摘されそう。では、どんな具合のわるいことがあるのかといえば、たとえば、叙述が冗漫でながすぎる、大仰で誇大な表現がおおい、内容が矛盾し混乱している——などがあげられよう。

これらの指摘、もつともなところもあるが、ただ、主観的な感想や特定の立場からの批判も、まじってなくはなさそう。そこで以下、これらの指摘を吟味しながら、いささかの弁護を試みたいとおもつ。

第一に、冗漫でながすぎるという指摘である。

この「玄覽賦」、たしかにながい。そして冗漫だ。なにしろ、あの司馬相如の「子虚上林賦」よりも、字数がおおいのである。とくにおのが事績を叙したり、故事を列挙したりする部分がぐどく、おそらく読者はうんざりしてしまつたろう。一篇の内容も、一事や一時に焦点をしぼることなく、半生を満遍なく叙そうとしたため、構成がゆるくなり、しまりがいい印象になつてしまった。それゆえ、滔々たる大長篇といえば、聞こえはよいが、際限のないお喋りをきかされてかなわんなあ、とおもつひともすくなくあるまい。

ただ、沈約「郊居賦」や左思「三都賦」、謝靈運「撰征賦」などの大作においても、いつおわるのかしらんという印象は、やはり存するのであり、これはもつ、長篇のもつ宿命というしかない。「玄覽賦」もふくめ、巨大な賦というものは、簡潔な表現やひきしまった構成などはめざさず、おなじようなことを、おなじようなふう

くりかえしてゆく。その執拗な反復によって、ある種の昂揚感や説得力をうみだしてゆくのだ。

その意味で、「冗漫な」と感じられる「叙法や巨大な篇幅は、むしろ必要なものというべきであり、あなたが批判することはできないのである。もしそれらを一方的に、「ながすぎるからダメ」と断罪したなら、「子虚上林賦」などもすべてダメ、ということになってしまいかねない。

第二に、大仰で誇大な表現がおおいという指摘である。

この指摘も、否定はできない。しかし、だからといって、欠陥ともいえないようだ。

たとえば、司馬相如の「子虚上林賦」を例にとると、この賦は、漢王朝、具体的には漢武帝の治世を美的に叙して、ほめたたえたものである。そのため相如は、たとえば、漢武帝の上林苑の沢には、蛟龍、赤螭せきち、鯢鱮けいじゆ、漸離、鯛鮓てうじゆ、鯪鮓けんたく、禺禺ぎよぎよ、魃た、鯢てうなどの奇怪な生き物がすんでいる、などと叙する。そしてそれらは、ヒレをあげて尾をふるわせ、鱗をあげ翼をふるわせ、さらに深い岩穴のなかにひそみ、かくれている——というのである。こうした叙述、真にそんな生き物（たぶん当時の人びともしるまい）がいるのか、いたらどうだということのか、など、はなはだ疑問はおおい。種明かしをすれば、相如はこの部分、「すでにおおくの指摘があるように」漢国の広大さや豊富さを強調しようとして、「こんな生き物までいるのだ」とぶちあげているのだ。つまり相如への意図は、存しているのである。

ただそうだったとしても、ここの記述、あまりに大仰すぎはしないかといえ、それはそのとおりだろう。しかしかく叙してこそ、漢帝国の威容が表現できるのであり、その意味でこうした大仰な叙法は、王朝賛美の賦には、必須のテクニクなのである。

蕭繹もこの手法にならない、意図的にそうした叙法（景物、なかでも果樹や草木の描きかた）を模して、父帝の

「そして自己の」梁朝を賛美していったのだった。もしこれがダメというのなら、王朝賛美の賦をかくことじたいが、不可だということになりかねないだろう。

もうひとつ、潘岳や謝靈運らは、詩文のなかでしばしば、自分を篤実にして謙虚な人間だとし、隠棲してじかな日々をすごしたい、などと叙している。軽佻浮薄の権化（潘岳）にして、傲岸不遜の化身（謝靈運）といふべき彼らが、こんな自他をあざむくようなことをつづるのは、ただの気どりにすぎず、これも、大仰に美化した発言だとせねばなるまい。

しかし、だからといって、そうした彼らの詩文をダメだ、と断じることができるだろうか。軽佻な人間は軽佻な詩をかき、傲岸な人間は傲岸な文をかかねばならないのか。もし自分をかざり、気どった発言をしたなら、そのひとは批判されねばならないのか。かくかんがえてくれれば、この「玄覽賦」における「事実とことなる」大仰な美化発言も、そうそう批判はできないだろう。

右は、漢賦と潘岳・謝靈運の作を例にだしてみたのだが、このように、文学の評価というものは、拠事直書をおもんじる歴史書などとは、基準がことなっているのである。その意味で、大仰で誇大な表現がおおいからといって、いちがいにダメとはいえないだろう。

第三に、内容が矛盾し混乱していて、なにをいいたいのかわかりにくい、という指摘をかんがえてみよう。

この賦に、混乱した発言がおおいのは事実である。たとえば一篇中に、「戦功をたてた」⇨著述がすきた」「悪漢どもをころす」⇨憐れみの情有有する」「儒者をこのむ」⇨玄学がすき」のとき、相互に矛盾し、自家撞着した発言が併存している。そのため、蕭繹がなにをいいたいのかが、よくわからず、主題が不明瞭にならざるをえないのである。

ただ、この「玄覽賦」、そうした欠陥はたしかにあるのだが、しかし、ここまで考察してくれば、この賦の主題は、おのずから了解されてくるのではあるまいか。蕭繹は、諸侯王として地方をめぐってきた、おのが半生をふりかえり、満足感や自贊の情にひたりつつ、この賦をつづつたのだ。そうだとすれば、彼がこの賦でいいたかったことは、「どうだ、オレはすごいだろう」ということ、これ以外にはありえないだろう。私は、「玄覽賦」の主題は、こうした自慢であり、自贊であるはずだ、とおもつのである。

ただ、あまりに自画自贊をかきつらぬすぎると、他人から警戒されたり、嫌忌されたりする恐れがあった。そうしたことを、蕭繹も気づいていたはずである。だから、他人に本心をさとられぬよう、篤実さや仁恕ぶり（こうした傾向も自分にあわせもつと、蕭繹はおもっていた）もまぶして、自贊ぶりをあいまいにさせたのだろう。この賦の内容が混乱したようにみえ、本心がわかりにくくなったのも、そのへんに原因があつたのだ。そのため、嗅覚のするどい読み手（たとえば蔡大宝がそれだ）でなければ、この賦の主題はわからなくなってしまったのである。

こうした事情をみてみると、「玄覽賦」の主題が不明瞭なのはそのとおりだが、それも、ある程度はやむをえないことだったといえよう。蕭繹は、自分のいいたいこと（どうだ、オレはすごいだろう）と、周辺への気がねとのあいだで、やむなく主題をぼかしてしまったのである。そうした事情も勘案すれば、なにをいいたいのかわかりにくいというこの賦の欠陥も、多少は弁護されてよいかもしれない。

以上、「玄覽賦」への批判を吟味しながら、その弁護をおこなってきた。ただかく、蕭繹よりの立場から陳弁したとしても、どうしてもかばいきれぬ欠陥が、ひとつある。それは、この賦中に充満する自慢や矜持が強烈すぎて、よむ者に「あざとい」という印象をあたえやすい、ということだ。つまりこの賦は、読後感がいへんわ

るいのである。

自慢や矜持をかたることは、本人には、気もちがよいことかもしれない。だが、それをきかされたり、よまされたりする他人からすると、その思いあがりや厚かましさが鼻について、不快で、いやな感じがするものだ。蕭繹はこの賦中で、篤実さや仁恕りをまぶしたりしているが、それとも、けつきよくは自慢（自分はこんなに篤実であり、こんなにあわれみぶかいぞ）にすぎない。それゆえ、この賦をよむ者は、「オレはえらいぞ」「あれもやったぞ」「これもできるぞ」などの自慢を、えんえんときかされるように感じてしまうのだ。こうした、しつこい自慢がよむ者にあたえる、不快であざとい印象、これが「玄覽賦」の致命的な欠陥だといってよからう。

くわえて、この欠陥は、蕭繹の最期によって、ますます増幅されることになった。

後人がこの「玄覽賦」をよんだとき、蕭繹の残虐な性格や執筆後の悲惨な運命を、想起しない者はいなかったろう。蕭繹こと元帝は、この「玄覽賦」をつくって九年後、都にしていた江陵を西魏軍によって、あつというまに陥落させられた。建康の父帝（蕭衍）に救出にむかわず、親族（弟や甥）をつぎつぎ殺害して、ひたすらおのれの踐祚をめざした結果が、こうした屈辱的敗北だったのである。

かくして、降伏した蕭繹（元帝）は刑死させられた。江陵にいた大勢の臣下や民衆も、捕虜や奴隸として、北方に拉致されてしまった。おまけに、混乱し、血まよった蕭繹は、江陵の陥落時、当地にあった十四万巻の書物を火をかけ、ほとんどを湮滅させてしまったのだ。書物の五厄のひとつとされる、文化史上の蛮行を演じたのである。

そうした彼の最期をしる人びとが、この「玄覽賦」中の自慢そつな発言をよんだとき、どうおもっただろうか。気のどくとおもうどころか、亡国の暗主が、なにをえらそつなことをいつているのか、と反発をおぼえたに相違

ない。「千古の罪人が、たわごとをいつているぞ」。彼らはそういいあったことだろう。

この「玄覽賦」は、さきにもみたように、たいへんな巨篇であり、また巧緻な修辭的彫琢がほどこされた美文でもある。だがかかる力作であつても、後世の文人からたかく評価されることは、ついぞなかつた。批評家から名篇だと言あげされることはなかつたし、また各種の選集に採録されることもなかつた。いわば文学史の底にすんだまま、だれにも注目されることがなかつたのである。その原因のおおくは、この賦が有するあざとい印象と、そして蕭繹の遺臭万載たる行為にあつたといつてよからう。

注

(1) 「玄覽」の語に関しては、拙著『六朝文評價の研究』一—六頁以降も参照。

(2) 第三段の「即我龜蒙」句（私の所領となつた）は、なにげない記述かもしれない。しかし『蕭繹集校注』三十六頁は、この句に対し、つぎのような見かたをしめしている。すなわち、この「龜蒙」は、周公の封地内にあつた山であり、蕭繹はその山名を、おのが所領の意にかりて、こゝ叙している（私の龜蒙となつた 私の所領となつた）。すると蕭繹はこの賦中で、自分を周公に比そうとしてゐるのではないかと。

この指摘にくわえ、蕭繹はさらに「豈連鑣於分陝、羨追蹤於二公」二句（どうしてこの所領に「他の地方王たちと」ならびたつて、二公（周公と召公）を模したりできようか）でも、「分陝」「二公（周公と召公）」の語をつかつてゐると、蕭繹はどうやら意識的に、自分を周公に擬しているようにみえる。

この「玄覽賦」の執筆は大同十一年（五四五）、侯景の乱が勃発する三年まえ（蕭繹三十八歳）だ。とすれば、この「蕭繹＝周公」の比擬を拡大させてかんがえれば、この時期に彼は、父武帝（当時は八十二歳）を周文王に、兄太子

(当時四十三歳)を武王に、そして自分を周公に、それぞれ比していたことになる。当時は、五兄の蕭統(廬陵威王)や六兄の蕭綸(邵陵携王)が、まだ元氣だったことをかんがえれば、これは、不遜な比擬だとせねばならない。こうした比擬が真になりたつとすれば、『隋書』五行志上の記事(前出)がいうように、この時期の蕭繹は、そうとう傲慢な態度をとっていたとしてよからう。

- (3) 六朝の紀行の賦を概観するにあたって、以下の業績を参考にした。つつしんで感謝もつしあげる。于浴賢『六朝賦述論』(河北大学出版社 一九九九)の第三章「紀行賦」、同『六朝紀行賦繁宋之鳥瞰』(『辞賦文学論集』江蘇教育出版社 一九九九)、馮莉『文選賦研究』(北京語言大学出版社 二〇一六)の第七章「紀行類」、中島千秋『賦の成立と展開』(関洋紙店印刷所 一九六三)の第五章第五節「賢人失志の賦の系統」、伊藤正文『所謂紀行の賦について』(『小尾博士古稀記念 中国学論集』汲古書院 一九八三)、同『続・所謂「紀行」の賦について』(『岡村繁教授退官記念論集 中国詩人論』一九八六)、原田直枝『賦史に於ける班氏紀行二賦の意義』(『お茶の水女子大学中国文学会報』第六号 一九八七)、同『潘岳西征賦攷』(『中国文学報』第四四冊 一九九二)。
- (4) 『文心雕龍』註賦も、紀行の賦をたいへん重視して、「若し夫れ京殿苑獵、述行序志は、並びて国を体し野を經むれば、義は光大を尚ぶ」という。京都や宮殿、狩獵、そして紀行や言志などの賦は、国家経営にかかわるものなので、雄大さが重視されるべきだ、という意味だ。つまり、紀行の賦はたんなる物見遊山を叙したのではなく、広義の政治にかかわる重要ジャンルだったのである。
- (5) 蕭繹は、第十段でも「不矯石閭之清」(きよらかな神仙の志もまげようとしなかった)とのべて、神仙へのあこがれをかたっている。
- (6) 『蕭繹評伝』一五二頁によると、蕭繹は張纘「南征賦」を意識して、彼の「玄覽賦」をつづいたらしい。すなわち大同九年(五四三)、張纘は湘州刺史に任ぜられて、建康から湘州へ旅だった。そのときの旅行を題材として、二千余字にのぼる大作「南征賦」をかいたのである。負けん気のつよい蕭繹はこれに刺激され、二年後、「南征賦」と勝ちをあら

そうつまりで、それをうわまわる巨篇「玄覽賦」をかいたのだ、という。この張績「南征賦」は、『芸文類聚』巻二十七に「行旅」としておさめられ、紀行の賦に属するとされている。とすれば、蕭繹もとつぜん紀行の賦をかこうとして、この「玄覽賦」をつつたのだらう。にもかかわらず、できあがった「玄覽賦」は、「自慢や自賛がつよすぎて」紀行でなく言志に分類されたのだった。